国立公文書館開館50周年記念

公文書管理法施行10周年記念

連続企画展②

おしゃべりな本たち

―謎解き！紙と文字から探る内閣文庫―

入場無料

令和3年

9月25日[土]－11月28日[日]

開催時間：午前9時15分～午後5時　期間中無休

記録を守る、未来に活かす。

独立行政法人
国立公文書館
NATIONAL ARCHIVES OF JAPAN

〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園 3-2　TEL：03-3214-0621

連続企画展②

おしゃべりな本たち

―謎解き！紙と文字から探る内閣文庫―

――耳を傾ければきっと聞こえてくる、本たちの声。

世界には1冊として全く同じ本は存在しません。なぜなら同じ題名や内容を持っていたとしても、印刷した時期や持ち主が異なっていれば、それぞれ違う来歴を持っていることになるからです。本の形や紙の素材、筆跡や蔵書印、果ては書き込みや虫食いなど、本に残された様々な手がかりに注目することで、本だけでなく歴史や文学の来た道を辿ることができるかもしれません。

本展では、国立公文書館開館50周年・公文書管理法施行10周年を記念して、本の形態や素材に着目する書誌学の手法を用い、当館が誇るコレクションである内閣文庫から、様々な知識を教えてくれる「おしゃべりな本たち」をご紹介します。

はじめに――本の形が教えてくれるもの

秘閣粘葉本　平家物語　　江戸時代前期写

源平合戦（治承・寿永の内乱）を描いた軍記物語『平家物語』の写本で、「秘閣粘葉本」と呼ばれているものです。

名前の由来は、徳川将軍の書庫である紅葉山文庫（通称「秘閣」）に所蔵されており、また糊を用いた装丁「粘葉装」で綴じられていることに基づくようですが、実際には「綴葉装」（糸を用いた大学ノートの綴じ方）が用いられていて、誤ったまま通称が定着してしまいました。

金泥・銀泥で装飾されており、紙も高級品が用いられています。ところが実際に読んでみると、乱丁・落丁が多いことに気付きます。

これは実際に読むために作られたからではなく、あくまでも、見た目や豪華さを優先して作られたため。江戸時代前期には主に大名家の嫁入り道具として、豪華な装飾を施した本が数多く作られていたことがわかっています。

【特022-0001】

写本・源氏物語と古活字版・源氏物語　　ともに江戸時代初期

『源氏物語』は平安時代中期に紫式部(生没年不詳)によって書かれて以来、さまざまな人々が繰り返し書写することで現代まで伝わってきました。このように手作業で写された本のことを「写本」と呼びます。

また室町時代から江戸時代にかけて印刷技術が発展。一度にたくさんの本を印刷することが可能になると『源氏物語』は庶民にも広がっていきます。印刷された本は「写本」に対して「刊本」または「版本」と呼ばれます。

本資料は2点とも『源氏物語』の「若紫」の巻ですが、上は江戸時代初期に書写されたもの。下は同じ頃（慶長年間：1596～1615）に木製の活字を用いて印刷されたものです。墨の濃淡や文字の形をよく観察してみると、違いがわかります。

特に木製の活字を用いた本は「古活字版」と呼ばれます。これに対して、一枚の木の板（版木）にページごと彫りこんで印刷したものは「整版」と呼ばれます。江戸時代に入ってからは、廉価で大量に印刷できる「整版」が主流となっていきます。

上【特010-0001】下【特130-0001】

文献通考

（明）嘉靖37年（1558）刊

日本では江戸時代に入った17世紀頃から木製の活字や版木を用いた印刷が盛んになりますが、それ以前から中国や朝鮮半島では金属製の活字による印刷が試みられていました。特に技術で先行したのは、朝鮮王朝で、15世紀頃には本格的な活字印刷が行われます。

本資料は古代～南宋の嘉定末年（1224）までの中国の諸制度を詳述した『文献通考』で、実際に徳川家康（1542～1616）が所蔵していたことで知られています。嘉靖37年に朝鮮王朝宮中にて銅製の活字で印刷されました。こういった本は「朝鮮本」と呼ばれて珍重され、特に政治に関する本は治世の参考とするべく徳川将軍や大名たちに愛読されました。

【294-0006】

太平記

天正6年（1578）写

写本・刊本ともに、本の出自に関する重要な情報は概ね末尾に記されています。写本の場合はこれを「奥書」、刊本の場合は「刊記」と呼び、写本の場合は参照した資料や写した時期、刊本の場合は版元（印刷刊行した本屋）の名前や刊行年が掲載されました。

本資料は『太平記』の写本で、奥書には出雲国三沢（現・島根県奥出雲町）の野尻慶景という人物が、出雲大社の社家の千家義広の所蔵本を天正6年に書写したことが記載されています。

『太平記』は半世紀にわたる南北朝の動乱の歴史を描いた軍記物語で、戦後間もない室町時代前期には成立したと考えられています。写本・版本ともに多く、特に江戸時代には「太平記読」と呼ばれる人々によって講釈されて広がりました。

【特100-0002】

1. ページ数に気をつけろ！

金吹方之図

文政9年（1826）頃写

本には常に乱丁・落丁の可能性があります。製本や改装（表紙を交換したり綴じ方を変えること）のときに脱落してしまったり綴じ間違えたりしてしまうことがあるからです。

ごく珍しい例として、あえて順番を混乱させることも。本資料は金貨の製造工程を描いた絵巻物で、全55図から成っていますが、順番が工程通りになっていません。添付された「訳書」と照らし合わせることで、ようやく作業工程が判明するようになっており、機密保持のために意図的に混乱させている可能性があります。

【183-0845】

うつほ物語

延宝5年（1677）刊

そもそも正確な本文が伝わっていない例として『うつほ物語』（『宇津保物語』）を挙げることができます。

『うつほ物語』は『源氏物語』よりも前に成立した日本最古の長編小説で、難船して波斯国（ペルシャ）に辿り着いた清原俊陰とその子孫の数奇な運命を描きます。

古い時代の写本はほとんど残っておらず、江戸時代に入ってからも刊行されたのはごく冒頭の「俊陰」巻のみでした。延宝5年に初めて全30巻で刊行されますが、もともと本文に誤りが多いにも関わらず、巻の順序や巻の題名を間違えた上に脱文まで発生してしまいました。

そこで本資料の旧蔵者は、正確な内容を復元するために、他の写本などと比較しながら本文の異同を確かめたり誤りを正したり、朱や藍で熱心に校合を加えたようです。この人物の正体は不明ながら宝暦4年（1754）に作業を完了したことが書き込みからわかります。この本はのちに、天保の改革の推進者として知られる水野忠邦（1794～1851）の手にわたりました。忠邦は国学者でもあり、この本によって研究を進めようとしたようです。

【202-0347】

II. 装丁の謎を追え

綴葉装の源氏物語と袋綴の源氏物語

ともに写年・刊年不明

装丁は本の特徴を知る上で大切な要素です。本資料はともに江戸時代前期頃に作られた『源氏物語』の写本と版本ですが、上の資料は綴葉装（糸で紙を数枚毎に束ねて綴じる方法、大学ノートの綴じ方）で下の資料は袋綴（紙を中央で折って袋状にして綴じる方法）で綴じられています。

綴葉装は紙の両面を使用するため、墨が裏側ににじみにくい厚手の高級紙向き。上の資料は実際に雁皮（ジンチョウゲ科の植物で栽培が難しい）が用いられており、高級品として製作されたことがうかがえます。残念ながら「葵」の巻しか現存していません。

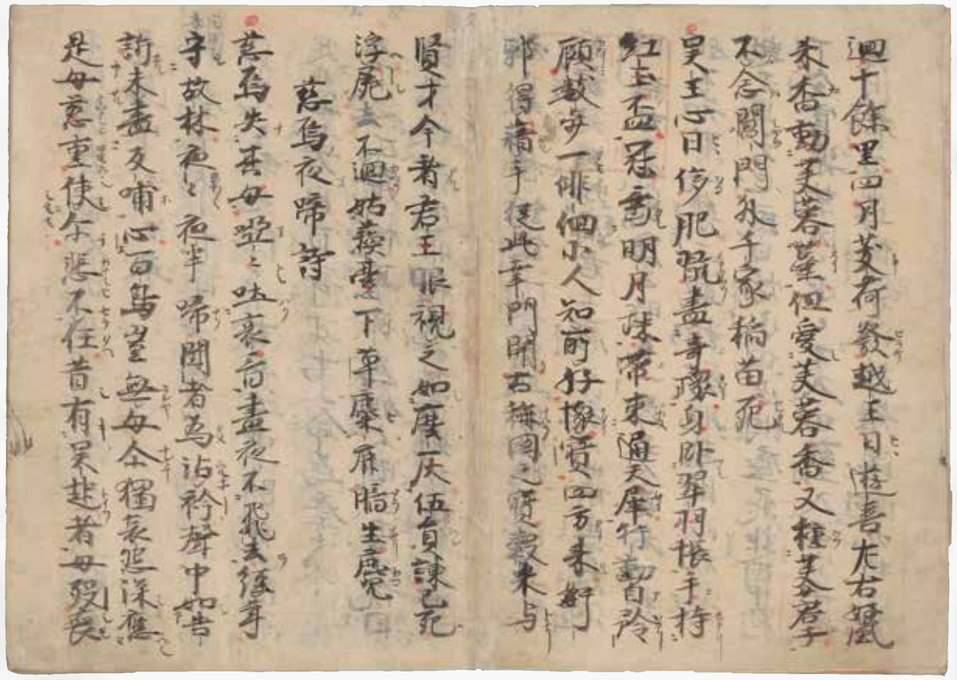
袋綴は裏面に墨がにじんでも、裏面を袋の内側にしてしまうので、薄手の安価な紙を綴じるのに向いています。下の資料は整版（一枚の木にページごと彫りこんで印刷する方法）でまとまった部数が刊行されたと考えられ、上の資料に比べると比較的安価で作ることができたと考えられます。下の資料も残念ながら「若紫」「須磨」「明石」が欠けています。

上【特048-0003】下【203-0001】

重要文化財

管見抄

永仁3年（1295）写



先に挙げた綴葉装と袋綴が多く見られる装丁であるのに対して、粘葉装（糊を用いて綴じる装丁）は比較的珍しいものといえるでしょう。糊の部分が剥がれて落丁してしまったり、虫に食われてしまったりする危険性が高く、次第に使われなくなってしまったようです。

本資料は、唐の白居易（772～846）が著した漢詩文集である『白氏文集』中より、治政の参考になる詩文を抄出したもので、永仁3年に鎌倉で書写されたと考えられています。『白氏文集』といえば平安貴族も愛した漢詩文集ですが、鎌倉武士たちはその美しい文章のみならず、白居易の政治思想や諷刺に強い関心を持っていたことがうかがえます。昭和32年（1957）に重要文化財に指定されました。

長い間、本書のほかに伝本が知られていませんでしたが、近年、新義真言宗智山派総本山智積院（京都市東山区）で断簡（本の一部分）が発見されました。糊が剥がれて本資料から脱落した部分だと推定されています。

【重004-0001】

百人一首

江戸時代初期

装丁は後世の人物が手を加えて変更する場合もあります。これを「改装」と呼びます。

本資料は「巻子装」（軸を付けて巻物状にした装丁）ですが、紙をよく観察してみると、等間隔に汚れがあるのがわかります。これはもともと冊子状の綴葉装または袋綴で装丁されていたものを一度ほどいてから、巻子装に直した痕跡だと考えられます。巻子装は木簡・竹簡にルーツを持つ伝統的な装丁方法で、内容の検索が難しく扱いにくいというデメリットがある一方で、格調の高い装丁と考えられていました。

本資料は、江戸時代初期の公卿・烏丸光広（1579～1638）の自筆と伝わる「小倉百人一首」です。その自由奔放な書風は「光広流」とも称されます。

【特033-0006】

三十六人歌合

文禄3年（1594）写

装丁は持ち主に許された究極のおしゃれ・こだわりの場でもあります。

本資料は三十六人の歌人の和歌を左右に配置して歌合（和歌の優劣を競い合う会）の形式にしたもので、戦国時代末期に関白・太政大臣等を務めた公卿・近衛前久（1536～1612）の自筆と伝わるものです。

本文部分の紙は楮を用いた比較的安価な紙で袋綴にされている一方、表紙や見返しは最高級のものになっており、書写された時期と装丁された時期に差があるとみるべきでしょう。

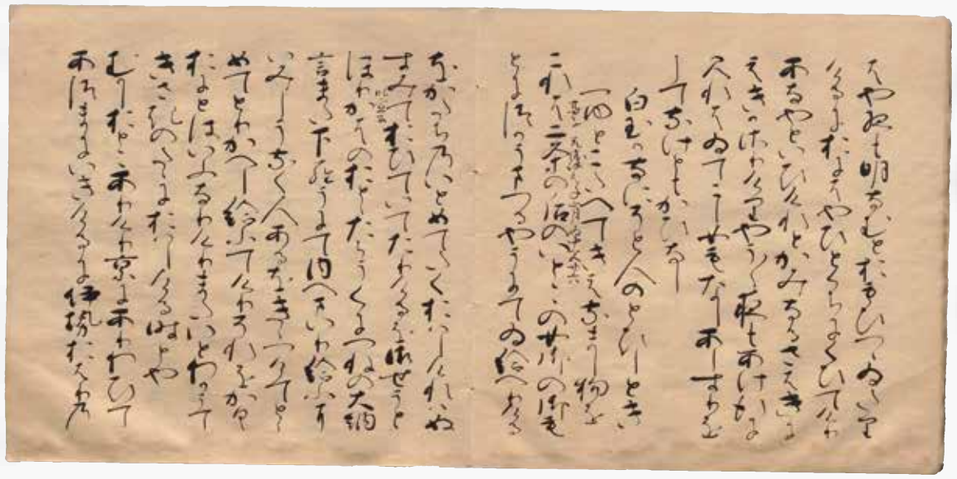
表紙は牡丹模様の緞子（光沢のある絹織物）を用い、霞模様の風流な題簽（題名を書いたしおり）が貼られています。さらに驚くべきは見返しで、表には金箔の上から龍が、裏には虎が描かれています。この龍虎の絵を手掛けたのは、幕府御用絵師として数々の障壁画を手掛けた狩野探幽（1602～1674）。題簽の文字は前久の孫で、後水尾天皇（1596～1680）の実弟に当たる近衛信尋（1599～1649）によるものだと考えられています。信尋は書・茶・画などの風流に通じた文化人としても高名であり、これほどの贅を尽くした装丁は信尋が祖父の書を飾るために施したものと考えるのが良さそうです。

【特118-0008】

iii. 紙の世界

伊勢物語

江戸時代初期写



本を構成する最も重要な要素は紙だといってもいいでしょう。

本資料は江戸時代初期に書写された『伊勢物語』で、厚手で光沢のある雁皮紙が用いられています。また本資料の場合、布の織目の模様が入っています。こうした紙は布目紙と呼ばれ、紙漉きの段階で特殊な加工を施して作られました。

本資料は大名で茶人として高名だった小堀遠州（1579〜1647）によって書写されたもの。文字は藤原定家（1162〜1241）の筆跡を模した定家様と呼ばれる書風で、「きれいさび」と呼ばれる美意識を確立した遠州らしく、紙や文字の細部に至るまで風流な趣向が尽くされています。

【特091-0008】

伊勢物語

慶長13年（1608）刊

紙や表紙に至るまで、こだわりを尽くした究極の本といえば「嵯峨本」です。

慶長13年に本阿弥光悦（1558〜1637）や角倉素庵（1571〜1632）らによって刊行されたこの『伊勢物語』は京都嵯峨で製作されたことから「嵯峨本」の名前で知られています。

美麗な文字を木活字によって印刷した上、精緻な挿絵入り。表紙は雲母で秋の草花が印刷され、独特の光沢を帯びています（雲母刷）。

さらに驚くべきは、頁の色が異なる「色替料紙」を用いている点です。有名な「東下り」の段には朱色の料紙が用いられていますが、ほかにも鶯色や象牙色などの料紙が見られます。

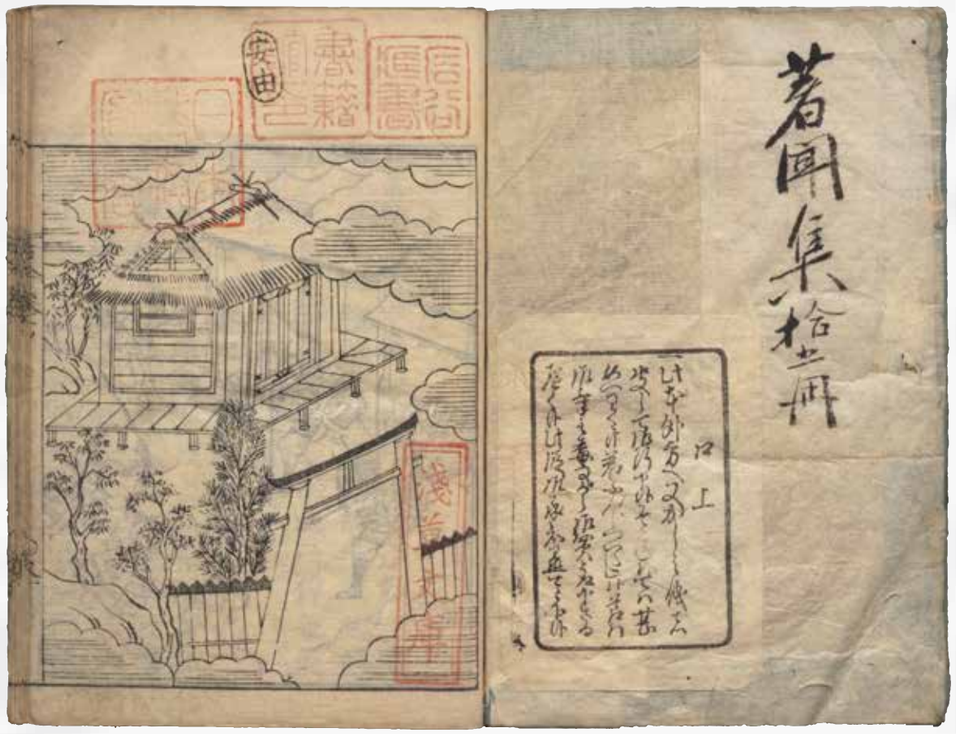
本資料は初版に相当するもので、ごく少部数しか印刷されなかったようです。刊記には校訂を手掛けた中院通勝（1556〜1610）による自筆花押が入れられています。

【特060-0017】

IV. 旧蔵者の痕跡を辿る

古今著聞集（ここんちょもんじゅう）

明和7年 (1770) 刊



書き込みや貼り紙など、一見本の内容に関係ないように見えるものでも、本の来歴を知る上で重要な手がかりとなるものがあります。

本資料は元禄3年 (1690) 初版の『古今著聞集』を明和7年に再版したもので、見返しに貼り紙が残っています。内容を読んでみると「又貸し禁止」「紛失の場合は弁償」といった注意書きであることがわかります。本資料はおそらく貸本屋（かしほんや）（主に行商を中心とし、定期的に各家庭や宿をまわって賃料を取って本を届けた）の蔵書だったのでしょう。

また第一丁目に捺（お）されている印の一つは、元薩摩藩士で東京国立博物館の初代館長となる町田久成（まちだひさなり）（1838〜1897）の蔵書印であることがわかっています。本資料は貸本屋から久成の手に渡り、のち政府に献納されて現在に至ると推定されます。

『古今著聞集』は建長（けんちょう）6年 (1254) に橘成季（たちばなのなりすえ）（生没年未詳）によって編まれた説話集です。

【210-0141】

V. 書物の敵

平家物語

明暦（めいれき）2年 (1656) 刊

ヴィクトリア朝時代の書誌学者ウィリアム・ブレイズ (1824〜1890) は、その著書で本の保存の上で大きな脅威となるものを「書物の敵」と呼びました。主な敵には火事や湿気、虫――そして人間を挙げることができるでしょう。

本資料は挿絵入りで刊行された『平家物語』ですが、旧蔵者の落書きが目立ちます。画像は「三井寺炎上（みいでらえんじょう）」の場面で、三井寺の僧たちが消火作業をしている様子が挿絵になっています。しかし、よく見ると、右下には髪を結った女性たちがいるように見えます。実はこれは旧蔵者による落書きで、僧の頭に髪を描き込んでしまったようです。

【203-0153】

浮世草子（うきよぞうし）ほうのかがみ草

元禄6年 (1693) 刊

あらゆる脅威を前にかろうじて形をとどめた本もあります。

本資料は元禄6年に刊行された浮世草子『ほうのかがみ草』ですが、一部が大きく欠けており、読むことが困難な箇所も複数あります。

しみや汚れの状態を観察するに、おそらく火事に遭った際に、消火用の水をかぶってしまったのでしょう。その後、乾燥が充分でなかったためにカビが発生してしみが残ってしまいました。このような流れで汚損する本は珍しくなく、本資料は本の受難の形を教えてくれる典型的な資料だともいえます。

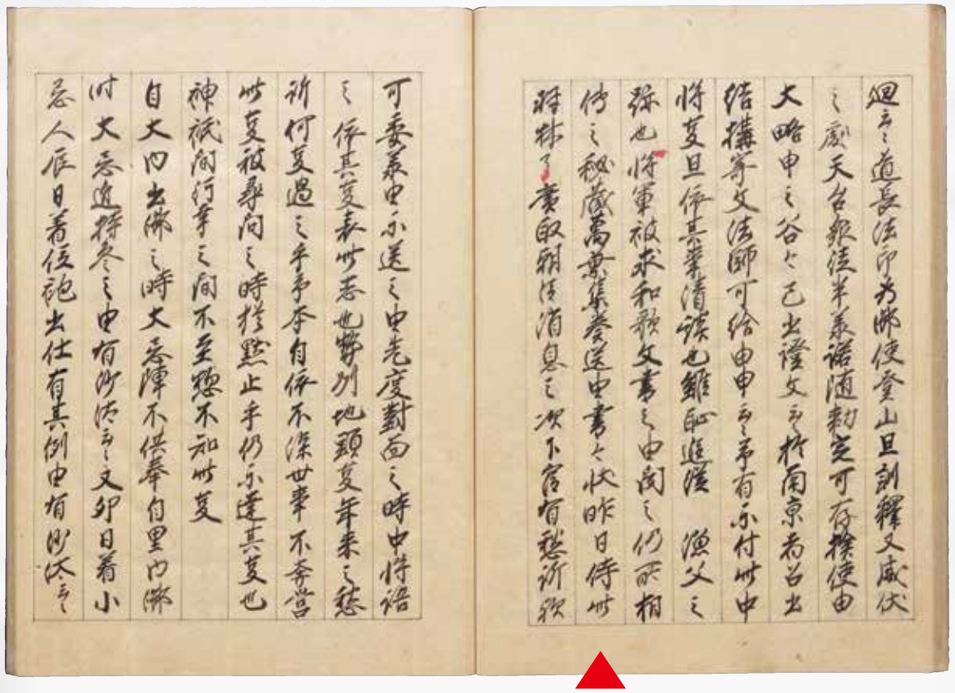
欠けた部分を補強するために裏打ちが施されています。明治時代に本資料が所蔵されていた浅草文庫（あさくさぶんこ）の蔵書印がこの部分に捺されていることから、明治時代以前にはすでに修復の手が入っていたようです。

【204-0088】

さいごに——資料を将来に残すために

明月記

慶長年間（1596〜1615）写



火事や虫食いなどの脅威によって書物は常に危険にさらされているといっていいでしょう。そんな本たちを後世に残すために、先人たちは努力を怠りませんでした。

例えば徳川家康は慶長年間に京都五山（京都にある臨済宗の五大寺）の僧たちに命じて、貴重な歴史資料を書写させています。これら一連の資料は「慶長御写本」の名前で知られ、現在も当館に引き継がれています。

本資料はその慶長御写本のうちの一つで、藤原定家の日記『明月記』です。定家は平安時代末期〜鎌倉時代初期という混乱期を生きた人物で、その日記には当時の社会情勢が克明に記されています。また歌人として『新古今和歌集』の撰者を務めたほか、『伊勢物語』や『源氏物語』など古典文学の研究にも尽力し、その際の書写・校訂の記録なども日記には残されています。

定家の子孫にあたる冷泉家には定家自筆の『明月記』が伝わっています。慶長御写本はこの冷泉家所蔵の『明月記』（写本も含む）を原本として書写したものです。

画像は、建暦3年（1213）11月8日、鎌倉幕府将軍・源実朝の求めに応じて、「秘蔵」の『万葉集』の写本を送ったという記述。定家は実朝の和歌の才を高く評価し、その指導をたびたび行っていました。

【特097-0002】

貞観政要

慶長5年（1600）刊

徳川家康は書写事業だけでなく、出版事業も手掛けています。

家康は、有用な書物が広く読まれるように、臨済宗の僧侶で足利学校（室町時代初期に足利氏によってつくられた学校施設）の校長を務めた閑室元佶（1548〜1612）に木活字10万個を与えて出版を命じました。そして慶長4〜11年にかけて『孔子家語』『六韜』などの書物が出版されます。これらの出版物は、元佶が京都伏見の円光寺の開山となったことから、伏見版（円光寺版とも）と呼ばれています。

本資料は、慶長5年に出版された伏見版『貞観政要』。家康に仕えた林羅山（1583〜1657）が所蔵していたものです。「貞観の治」で知られる唐の皇帝太宗（在位：626〜649）が群臣と交わした政治論議を40編に分類した書で、編者は呉兢（670〜749）。中国では為政者の教科書として読み継がれ、日本でも鎌倉時代から将軍の必読書とされ、家康も愛読者の一人でした。

【別025-0003】

源氏物語玉のみすまる

文化11年（1814）写

大規模な書写・印刷事業だけが、貴重な資料を後世に伝えてきたわけではありません。学者たちによる地道な研究が、それを支えてきました。

例えば『源氏物語』は成立直後から注釈、登場人物の系図、年立て（作中年表）や用語辞典などが作られ、およそ1000年に及ぶ先人たちの研究の成果によって現在に伝えられてきたといえるでしょう。

本資料はその研究の過程を知る上で貴重なもののひとつ。『源氏物語玉のみすまる』は、『源氏物語』に使用された語句を50音順に整理して解説した源氏物語事典で、本資料は作者の荒木田守訓（1767〜1842）による自筆稿本（自筆の下書き）です。多くの書き込みや付箋、修正跡によってその編集作業が垣間見えます。

【203-0040】

独立行政法人
国立公文書館
NATIONAL ARCHIVES OF JAPAN

〒102-0091　東京都千代田区北の丸公園3-2
TEL：03-3214-0621

アクセス▶東京メトロ東西線竹橋駅下車
［1b出口］徒歩5分

http://www.archives.go.jp/

@JPNatArchives

@JPNatArchives